

—講演要旨—第 43 号 2005 年秋季号

第 3 2 回セミナー 「元気の出る認知症老人の理解」 平成 17 年 7 月 27 日 (水)

講師：東京大学名誉教授 (医学部)、元国立環境研究所長 大井 玄氏

於 東海大学校友会館 (霞ヶ関ビル 3 3 階)

3 2 回セミナーでは、大井 玄先生より、痴呆 (認知症) は、年をとると体力が衰えるように脳が老化するもので、「怖い」ものではないとの哲学的なお話を伺った。

先生は東京大学医学部卒業。米国ペンシルバニア大学グラジュエート病院内科レジデント、ジューク大学医学部血液科フェロー、東京都立衛生研究所副参事研究員のあと、ハーバート大学公衆衛生大学院終了、同大学院労働医学科フェロー、東京大学医学部衛生学助教授、帝京大学公衆衛生学教授、東京大学医学部成人保健学・大学院国際保健学教、国際環境研究所所長などを歴任された。社会医学の分野では、鉛の地域汚染、水俣病、日本に於けるエイズの将来予測、認知症老人の精神症状発現とケアなどの問題に関わってこられた。現在は終末期医療に関わる傍ら、「メコン河流域の生態系変化のプロジェクト」、地域の認知症患者の相談、健康相談などボランティアとして関わっておられる。

1. 私達とは？

長年認知症老人の世話をしてきた老女が介護に疲れ、「本当の私の時間がもてぬ」とこぼしていた。この認知症老人と、介護に疲れた老女の「本当の私とは何か？」考える必要がある。

我々は父母から生まれてきた。自分の意思によらず、命ぜられて生まれたゆえに「生命」という。父母の前は祖父母、更にその先を辿れば、もぐらのようになったり、魚のようになったり、ついには三十数億年前の原始生命体へと繋がっている。この原始生命体は、分化して、すべての植物、動物、細菌、ウイルスへとつながってきている。今生まれた赤子は、三十数億年の生命に繋がりを現わしている。

また呼吸により、我々は他の生物とガス交換を行い、新たな相互関係を形成している。

百五十億年前、宇宙は混沌とした超高温の物質の固まりから、初めに水素原子が生まれたらしい。これが集まり、星に成長し、ついで老化、爆発、分散、再集合、星の生成とリサイクルを繰り返している。我々の体の 2 / 3 は水分で、水素の原子核の寿命は 1000 億年の 1000 億倍以上という。

人間も宇宙のリサイクルに組み込まれ、我々は星の子である。人間も老化して、死に、分解し次の生命に移って行く。老と死があるからこそ誕生

がある。

2. 痴呆はなぜ恐れられるのだろうか

自分が痴呆に罹ったと仮定して、なぜ痴呆が怖いのかは文化によって異なる。

日本人の大多数は「周りの人に迷惑を掛けるから」、欧米人は「自分の自主、自立が失われるから」怖いのである。

米国では「自己は他者から独立した存在」として理解されている。英語を共有するが、文化の異なる各国より来た人々の集合体で、広い土地、豊かな自然、移動の自由が基本となり、自己責任・独立的自己が倫理意識の中心となった。開放系相互独立型自己の世界である。故に、痴呆は自立を失うから怖いのである。

日本は、徳川時代を通して見られるように、狭い土地、貧しい収入のために、お互いに分かち合う習性が付いた。常に周りを見回し相互扶助、我欲を押さえ「和」を目指す習慣が形成され、閉鎖系相互協調的自己の世界となった。ここでは周囲に迷惑をかけるから痴呆が怖いのである。

この様に痴呆に対する人々の恐怖は、その人の自己観、倫理観、文化、環境によって異なる。

閉鎖系相互協調的自己の世界では、地域が「痴呆のケア」をきちんと出来るようになれば「迷惑になりたくない」という気持ちはずっと薄れるで

あろう。

3. 痴呆は病気か？

病気とは普通の状態が損なはれ、疼痛の症状を伴うものである。痴呆は症状が分かり難く、病気と判別しにくい。体力の衰えが老化ならば、知力の衰えが痴呆かも知れない。

1982年、「ぼけ老人」と「正常な老人」と見なされている人々の知力テストを行った結果、「ぼけ老人」の約20%は知力の低下が殆んど見られず正常で、「鬱」の誤解が多かったと思われる。「正常老人」の10%には中等度から重度の知力低下が見られた。老人は、周囲の人の期待と異なる言動をすると「呆け」と見られがちである。老人の所作が多少変わっていても、周囲の人がそれは年寄りの普通の行為と受け止めれば「呆け老人」は発生しない可能性がある。

1978年、琉大の精神科医が沖縄佐敷村で、65歳以上の老人708名の精神科的調査を行った。老人性痴呆の老人は27名、全体の4%で、東京での痴呆老人有病率と変わらない。しかも沖縄では鬱状態・妄想・幻覚・夜間せん妄症状を示した痴呆は居なかった。東京都調査では痴呆老人の20%位が夜間せん妄を現し50%がその他の精神症状を示した。米国では痴呆の25～50%が「鬱」と報告されている。沖縄では、痴呆であっても社会生活を営むことの出来るゆったりとした時間が流れていて、能力が衰えてもそれを目立たせぬ許容時間があつた。沖縄の高齢女性の家事労働を見ると、正常者の九割は家事を行うが、中程度低下者でも八割、重度低下者でも全員が細々と家事をしていた。沖縄ではゆったりとした時間だけではなく、老人には敬語を使い、逆らうことなく、記憶・知力が低下しても自尊心を尊重した日常が続いている。「痴呆」は脳の老化で、病気だとしても、環境が主に作る病気では無かろうか。

4. 「痴呆」についての見方

アメリカにおけるAD（アルツハイマー病）は1995年：50万人、2000年：500万人だという。また、教科書によれば、65才以上：重度のADは5%、軽度のADは15%、80才

以上：重度のADは20%という。もし、年とADが比例して増えるとすれば、軽度のADは（60%）で、80才以上になると80%以上が「痴呆」になることを示唆している。

「痴呆」は脳機能の低下によるが、記憶力・理解力・計算力等の知力により測られる。しかしながら老人は宇宙に戻る直前にあり、これら成人と同じ機能を持つ必要はない。

「痴呆」の状態 ①忘れっぽくなる、忘れたことの自覚がない、他人のせいにする。 ②認知能力の衰え、自分の居る場所・時の見当識喪失。 ③目の前の事象が起きた意味がわからない。 ④プライドが傷つきやすい、自己防衛。 ⑤異なる事象の理解不能。更に進むと 子供時代の人格に戻った様になる、最後には言葉も失われる。

*痴呆老人同士の会話：老人ホームでは数人の老人が楽しく話をしている。その中身を聞いていると、各人それぞれ自分だけ勝手に喜々としてお喋りをし、隣人の話とは関係がない。会話には情報伝達と情動共有による楽しみがある。ここでは情報交換の要はなく、鳥の囀りに似て音律のみを楽しんでいる。 *回帰人格（夕暮れ症候群）：夕方になると若いときの人格に戻る。現在の人格では、苦痛はときに起るようにも見える。「純粹痴呆」という異常精神症状は老人にとって苦痛の無い状態と思われる。沖縄の佐敷村は「純粹痴呆」の理想的ケースであろう。 *痴呆の人は「癌」の痛みを感じない。またコトバが失われた段階では、「自我」もなくなり、その消失により苦しみが無くなり、「死」に対する恐怖が無くなる。

5. 痴呆の進む段階

i) 私たちの頼みとする「知性」を捨て、ii) 私たちの頼みとする現在の人格「自己」を捨て、そしてiii) 私たちが頼みとし、またそれによって苦しみの根元となる「コトバ」を捨てる過程だといえる。それは、まさに、人間が最も執着する、そしてそれによって苦しめられる「根本的煩悩」を捨てることといえる。

(常務理事 安達 勝雄 記)